

エッセイ

ジャズる辞書―モダン昭和の流行語

細川 周平

私は長く日本のジャズ史を追いかけ、昨今は戦前に集中している。わかったのは昭和初頭のモダン時代、ジャズの語は音楽に限定されず、流行する物事や価値観、時代の気分を指していたことだ。そのためアメリカではジャズ・エイジと呼ばれ、日本にも伝えられた。モダンボーイ、モダンガール、カフェー、シネマに代表されるアメリカ風俗が流行し、ジャズは時代の輝きを象徴する存在、かつ言葉だった。大空社の「近代用語の辞典集成」シリーズのうちの関東大震災後発行の二九巻を手に取ると、ジャズの項目を含むのは二〇巻で、かなりの人気語であったことが分かる。

まず標準的な記述を出発点としよう。「ジャズ、バンド (Jazz band 英) アメリカ黒人の騒がしい音楽隊、淫猥で、野卑で騒がしい」(『近代新用語辞典』修教社書院、一九二八年)。解剖すると(一)ジャズ・バンド(用語)、(二)アメリカ黒人(起源)、(三)騒がしさ(音響、音質)、(四)音楽隊(芸術性)、(五)淫猥、野卑(低俗性)。それぞれについて他の辞典を読み合わせ、同時代独特の意味を探してみたい。

(一) 用語。ジャズではなく「ジャズ・バンド」を項目に立てているのに目が向く。概念として演奏者、演奏形態がジャンルに先行している。ジャズとバンドは分かちがたい。またジャズの語源として、アフリカ土俗語の「出来るだけ速く」からきたという説（これはスピードの比喩としてのジャズと関わる）、アフリカ人の踊りの時の口癖に由来するという説、ヴィクスベリーのチャールズという太鼓手のあだ名から来たという説を複数の辞書が挙げている（『モダン辞典』弘津堂書房、一九三〇年など）。和製英語である「ジャズソング」の項を英語併記で立て「ジャズ音楽の中に入る歌。卑俗なものが大部分。転じて一般に俗っぽい歌をいう」（『最新百科社会語辞典』改造社、一九三二年）と、もっともらしく解説しているのが可笑しい。

(二) 起源。アメリカ黒人やアフリカ奴隷の寄与を明記した辞書とそうでない辞書がある。「元阿弗利加黒人間に発生した舞樂が一六一九年和蘭商船の輸送せる十四人の黒人奴隷と共に米國に渡り近年ホワイトマン氏によつて完成されたもの」（『新聞語辞典』栗田書店、一九三三年）。このポール・ホワイトマンはジャズ王と呼ばれた白人のバンドリーダーで、大人氣を得ていた。このようにアフリカの野蠻を白人が芸術化したという説は、ホワイトマン自身の著作『ジャズ』（一九二九年に邦訳）ほかあちこちで読める。珍しい記載として「インディアン土俗音楽に端を發した音楽」と記した辞書がある（『新文芸辞典』誠文堂、一九三二年）。「素とアメリカに於ける黒奴（ニグロ）とか布哇土人などの未開な音楽を真似たもの」という記述もあり（『現代新語辞典』大日本雄弁会講談社、一九三〇年）、合衆國領土の「未開」すべてをジャズは引き受けたようだ。「アメリカで発生した寄席向きの音楽」と大衆性を明記した『最新百科社会語辞典』は「昔の名作を勝手に編曲したものや、民謡をとったものや、舞曲をとつ

たものや種々ある」と曲目の実情をきっちり述べ、他の辞書に多い文明論的調子を落としていく。

(三) 音響。騒がしきは多くの辞書で言及され、ジャズ概念の中心にあった。「ブー・ブー・ガチャガチャの騒騒しい賑やかさのこと、又は、大都会の喧騒のことにもいう」(『新しい時代語の字引』実業之日本社、一九二八年)。騒がしきはここでいう音響的な意味にとどまらず、不調和、粗野の意もあり(『常用モダン語辞典』好文閣、一九三三年)、日常語ではむしろこちらの意味で応用された。たとえば「極めて騒々しくて落着かない雑音」の隠語となって「台所のジャズ」「街頭のジャズ」という使われ方もあったという(『モダン語漫画辞典』洛陽書院、一九三一年、『現代新語辞典』大日本雄弁会講談社、一九三〇年)。つまり喧騒、多忙の洒落た言い替えでもあった。この延長で女学生は「よくがやがやと喋舌るやかましい人」を「ジャズさん」と呼んだそうだ(『モダン新用語辞典』教文堂、一九三一年)。

語源はジャズjazzという不愉快な音だが、「今ではジャズにも相当音楽的なものも出てくる」と雑音が「音楽」に文明化したという認識もある(『常用モダン語辞典』好文閣、一九三三年)。別の辞書では動物の鳴き声を出す笛、チャールストン・マシン(?)をジャズ固有の楽器としている(『モダン新用語辞典』教文社、一九三一年)。楽器未満の雑音の道具なのだろう。同じ辞書はハワイアン・ギターやウクレレも加え、フラ音楽もジャズに加えている。当時ジャズがいかに幅広い音楽や流行を抱きかかえていたかを知る。

(四) 芸術性。音楽性を否定する未開主義が主流だが、音楽としてしっかり扱った辞書もわずかにある。「(ジャズは)リズムの縮小されたフォックス・トロットを切分法化したものである。切分法によって順調なメロディが、結滞させられ、不順にさせられる」(前掲『モダン辞

典』)。切分法（シンコペーション）の語を理解した読者は少数だったろうが、もっともらしく聞こえるだけで辞典の最低限の機能は果たしている。リズムの強さはジャズの命で「切分法という丁度順調な血液の運動に結滞させたり急進させたりする如く刺激的形式を以って新しい楽器により現代を慰めるもの」（『モダン語辞典』誠文堂、一九三二年）とも呼ばれている。切分法を血流を刺激する過剰な生理活動に直結している。この辞典はすぐあとに血の概念と切り離せない人種概念を切り出している。ジャズの起源は不明と匙を投げたうえで、「ニグロの黒ん坊からわいて出たことはたしからしい」。黒人即ち未開人種という明治以来のステレオタイプに乗って、ジャズのアフリカ起源は語られた。

『プロレタリア文芸辞典』（白揚社、一九三〇年）の「ジャズ・バンド」の項（「ジャズ」の項はない）は参照した辞書群のなかで異彩を放つ。まずそれは「黒人の民衆音楽の曲調と、アメリカ都市生活の欲求によって集団的に作りだされたもの」と定義されている。「集団」的制作用はプロレタリア思想に適った発想で、黒人の寄与を大きく評価している。かなりイデオロギー的な扱いである。ジャズ・バンドは「音符がなくて、ただ簡単なおぼえ書のようなものがあるだけで、いわば即興の音楽で、その指揮は、大太鼓と、コントル・ファゴットが指定するところのリズムの秩序でやる」。今でこそ即興性はジャズ音楽の最大の特徴と考えられているが、参照した辞書群でそれを明確化したのは少ない。ジャズ・バンドには「古い音楽の持っている均衡のとれた調和とか、構成などは少しもないかわりに、内面的で、而かも力強い表現が味える」。ヨーロッパ由来のクラシック（つまりブルジョア音楽）にないたくましさや備えた新しい音楽として肯定している。しかしそれは同時に工場を所有する側「ブルジョアの音楽」にもなり果てる可能性を持っている。白人連中が理想のプロレタリア音楽を奪い取ったと

いう趣旨である。何かの抄訳と思えるが、大震災後の左翼的風潮がジャズ解釈にも届いた。

(五) 低俗性。ジャズはデカダン、猟奇、奇妙な刺激、粗野、誘惑、変態などと結びつき、道徳、品位に欠くと見なされた。こうした文言はどこからでも拾える。ダンスのステップから軽快さが連想され、意味の重みを外したナンセンスがパートナーとなった。「ジャズは」軽快とナンセンスが特徴、これは正調ナリズムに何等の刺戟を感じなくなった近代人の猟奇的な気分を満足させる為に自づと生れたもので原始的な匂いと近代的な匂いとをカクテルとした様なもので、軽快で華かな為か近代人の本能満足の伴奏曲として愛好される」(『これ一つで何でも分る現代新語集成』博隆社、一九三二年)。軽快、ナンセンス、猟奇が「正調」の対極に置かれていた。近代人はことごとく「機械の音響に疲れ」、正調から逸脱した部分をジャズの刺戟で愛撫される必要がある。大流行した「東京行進曲」(一九二九年)の歌詞「ジャズで踊ってリキールで更けて」を「正に現代相」と結論している。別の流行語と結託して意味を失らせた例として「ジャズとは」即興的な切分法の形式と原始的・ウービー的・哀愁的旋律を特徴とする」と述べる辞典があり、今度「ウービー」を引くと「歓喜の姿、不景気知らず」とあり、何かわからないが「朗らかに微笑ましい映画、演劇、ダンス、ジャズ、痛飲、猥談等々皆ウービーである」(『新聞語辞典』栗田書店、一九三三年)。この言葉は「ウービー・ガール」という流行歌もあるように、ナンセンスすべてにあてはまる万能のはやり言葉だった。

「ジャズ」とは別に動詞形「ジャズる」を立てた辞書によると、「ジャズる ジャズめいたただらしのない、しかも騒々しい生活を送る事、又ジャズに合せてダンスを踊る事」(前掲『モダン辞典』)。ダンスよりも生活がまずジャズる本体というのが、ジャズ・エイジと呼ばれるにふさわしい。「ジャズの如く、ジャズに浮れて、ふらふらする、与太を飛ばす、騒々しくやつ

ちゃう、生活する、何でもかまわない出鱈目に踊る具合に暮しちゃう」(前掲『モダン語辞典』)。このゆるゆるの文体がすでにジャズっていると考える。

新語辞典の読み合わせから、数年間にジャズなる語の意味が爆発するのを確かめてきた。流行語として勝手な意味をふりまくこと自体が、ジャズ・エイジらしい。ジャズ・エイジの終焉はこの看板語の洪水の終焉を指す。満州事変後には浮かれにくくなり、ジャズは概してダンスやアメリカ音楽の文脈に限定されて使われるようになった。外来の流行音楽は次から次へと現れたが、これほど流行語となり、意味の幅を持った用語はないだろう。さて、周りで「ジャズさん」を探してみましよう。ジャズってみましよう。今と違う九〇年前の「ジャズ」を感じるために。

(国際日本文化研究センター教授)